



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 名前と家族のことばが紡ぐアイデンティティ  |
| Author(s)    | 白, 皓  |
| Citation     | 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2025, 21, p. 24-38  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/102057">https://hdl.handle.net/11094/102057</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

## 名前と家族のことばが紡ぐアイデンティティ

—成人した中国系移民第二世代のオートエスノグラフィー—

白 翔（白 璞琨）（明治学院大学教養教育センター）

xiaohaku@ed.meijigakuin.ac.jp

### The Identity Shaped through Name and Family Language:

An Autoethnography of the Grown-up Second Generation of Chinese Immigrant

Hikari HAKU (XiaoXiao Bai)

#### 要旨

日本では1980年代後半から中国系ニューカマーが増加し、第二世代も成人した。しかし、成人期のアイデンティティや使用言語に関する研究は少なく、特に氏名は言語教育の領域でほとんど論じられてこなかった。本稿は、名前と家族のことばが個人のアイデンティティに与える影響を提示するものである。「私」はオートエスノグラフィーを用いて、アイデンティティの危機から再構築に至る過程を記述し、感情の記録や両親への手紙を通じて言語・氏名・アイデンティティの関連を探った。結果、喪失・母親との言語的齟齬・自己の回復の物語が描かれた。日本国籍取得時に本名の変更を強いられたことが自己認識に多大な影響を及ぼす一方、成人後パートナーに本名で呼ばれることが自己の再確認に繋がった。また、母語を用いた両親への手紙が、親子関係の見直しと自己の再定位に寄与した。本名と母語は、重要な他者との関係を再構築する媒介として機能し得ることが示唆された。

#### Abstract

Since the late 1980s, the number of Chinese newcomers in Japan has increased, and the second generation has now reached adulthood. However, research on identity and language use in adulthood remains limited, and personal names have been scarcely discussed in the field of language education. This paper presents the impact of my name and family language on personal identity. Using autoethnography, I described the process of experiencing my identity crisis and reconstructing my identity, and explored the connections between language, my name, and identity through emotional records and letters to my parents. The results depicted three narratives: loss, linguistic conflict with my mother, and the recovery of the self. The enforced change of my real name upon acquiring Japanese nationality had a profound impact on my self-perception, leading to a deep sense of existential loss. Meanwhile, being called by my real name by my partner in adulthood facilitated a reaffirmation of myself. Furthermore, writing letters to my parents in my mother tongue contributed to the reconsideration of my relationship with my parents and the redefinition of myself. These findings suggest that one's real name and mother tongue can function as mediation forces in reconstructing relationships with significant others.

キーワード：アイデンティティ、母語、本名、重要な他者、主体的な位置づけ

## 1. はじめに

1980年代後半、日本社会では中国系ニューカマー（第一世代）が増加した（駒井, 1995; 丁, 2022）。第一世代の子どもにあたる第二世代も増加し、第二世代の幼少期や青年期に関する研究が移民研究を中心に蓄積されてきた（白, 2020; 樋口, 2024）。2025年現在、「子ども」として研究対象とされた人々は、大学生や社会人となり、言語とアイデンティティが議論の俎上に上がってきた（永井, 2015）。筆者は、成人した中国系第二世代の一人であり、日本と中国という2つの社会を移動する中で、アイデンティティの危機、すなわち自己の「斉一性と連続性」の拡散（大倉, 2013）とその寛解を経験した。筆者はその後、本経験をオートエスノグラフィー（アダムス他, 2022）記述としてまとめ、重要な他者に対する「主体的な位置づけ」を経験した。

「重要な他者」と「主体的な位置づけ」は、関係性発達とアイデンティティおよび統合性と密接に関連する。永田・岡本（2008）は、親子関係や夫婦関係など「重要な他者」との関係が、アイデンティティ形成の基盤となり、全体的な問題へも影響を及ぼすと指摘している（p.339）。また、関係性の危機を通じて重要な他者との関係を再考し、それを自身の人生に主体的に位置づける過程が、アイデンティティと統合性の発達に関与すると述べ、この段階を「主体的な位置づけ」と呼ぶ。エリス・ボクナー（2016）によれば、オートエスノグラフィーは単なる手法ではなく、生き方の実践でもある。本稿の執筆は、筆者の経験を意味づけ、アイデンティティを再構築する過程であり、この営み自体がオートエスノグラフィーの実践といえる。

本稿の目的は、名前と家族のことばがアイデンティティに与える影響を読者に提示し、対話を促進することである。具体的には、喚起的オートエスノグラフィー（Bochner & Ellis, 2016）を用い、「私」の経験を通じて氏名・言語・アイデンティティ、そして重要な他者との関係性を喚起し、読者とともに振り返る契機を提供する。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

本節では、言語とアイデンティティの関係、およびアイデンティティと氏名に関する研究を概観し、本研究の位置づけを明確にする。

まず、言語とアイデンティティの関係は、言語教育や母語・継承語教育において重要なテーマである（北原他, 2024）。母語の維持は、アイデンティティ形成や文化的アイデンティティの強化に寄与すると指摘されている（知念, 2019; トロイツカヤ, 2015）。特に、幼少期や青年期においては、母語使用の増加が民族的アイデンティティの確立と関連する可能性が示唆されている（薛・陳, 2012）。一方で、継承語を保持できなくても、文化的要素を通じて民族的アイデンティティを形成し得るとする研究もある（梁, 2022）。

従来の研究が幼少期・青年期の言語とアイデンティティ形成に焦点を当ててきたのに対し、本研究は、成人期におけるニューカマーの言語とアイデンティティの関係に着目する。特に、確立されたアイデンティティが言語と氏名により揺さぶられ、再構築される過程を探究する点に特徴がある。こう

した成人期のアイデンティティの危機や再構築の過程に関する研究の不足を補うべく、中国系である「私」の経験を通じて、言語とアイデンティティの関係を再考することを試みる。

次に、アイデンティティと氏名の関係は、個人の自己認識や所属意識の形成において重要なテーマである。特に、エスニック・マイノリティにおいて、氏名の使用や変更はアイデンティティに大きな影響を及ぼす。在日韓国・朝鮮人の氏名研究では、本名使用の強制や改名が法的問題として議論され(柳, 2016)、氏名が個人のアイデンティティや社会的受容に与える影響が指摘されている。日本社会では、氏名が社会的地位や文化的アイデンティティを象徴し、その変更や強制使用が自己認識に深刻な影響を与えるとされる<sup>1)</sup>。

筆者は、こうした法的制約による氏名の強制使用とグリーフ(喪失体験による深い悲嘆)、本名の回復、アイデンティティの再構築を経験し、重要な他者に対する「主体的な位置づけ」を経験した。「サバイバー」としての当事者の視点から「生きられた経験」を記述する。本記述には、個人の経験を物語として提示し、読者に再帰的な省察や感情的共鳴を促す意義がある。また、この試みは、2025年現在の日本社会における氏名・言語・アイデンティティの関係性を浮き彫りにし、社会的な力学的理解を深める契機となる。

本研究の意義は二点に集約される。第一に、従来の言語とアイデンティティ研究が子どもや青年期を主な対象としてきたのに対し、本研究は、中国系ニューカマーの成人である「私」を対象とし、その空白を補う。第二に、在日韓国・朝鮮人の氏名研究は蓄積されてきたが、ニューカマーの氏名問題は十分に検討されていない。本研究は、当事者の視点からこれらの側面を記述し、氏名・言語・アイデンティティの関係を再考する知見を提供する。

### 3. 研究方法

本研究では、オートエスノグラフィーを方法論として採用し、データ収集・解釈・記述および表現を統合的に行う。本手法は調査者自身を研究対象とし、主観的な経験を表現しつつ、自己再帰的に考察するものであり、経験の客観的な記述よりも「意味づけ」に重点を置く(井本, 2013)。本稿では、オートエスノグラフィーを(1)研究手法、(2)研究者自身が記述した成果物(オートエスノグラフィー記述)として用い、経験的かつ現象学的アプローチを重視する。オートエスノグラフィーの意義は、その当事者性にある。サイレント・マイノリティが語れない状況を克服する方法としての価値が指摘される一方、自己経験をデータとすることへの批判や社会科学的な意義付けの難しさも指摘されている(井本, 2013; 鈴木, 2010)。しかし、マイノリティ当事者が自文化を発信し(鈴木, 2010)、周縁的視座から新たな介入を試みる点で意義がある(石原, 2021)。

本稿では、2022年4月から2024年3月にかけて、(1)オートエスノグラフィー記述、(2)フィールド・ノーツ(日本語教育機関における実践記録)、(3)ジャーナリング・データ(感情や思考の自由記録)を記述・収集した<sup>2)</sup>。また、「私」のアイデンティティの危機を中心に、ジャーナリングやパートナー・父親との非公式の対話、「感情的想起」(エリス・ボクナー, 2006)を行った。感情的想起とは、心身を過去の場面に戻るよう想像する方法である。さらに、文化的視点から「経験の内と外を行き来」し(エリス・ボクナー, 2006, p.152)、自分の経験を社会的構築物として捉えた。そのうえで、アイデンティティの危機・拡散から寛解に至る過程での「重要な他者」との言語的やり取りと氏名に

注目した。本稿での「重要な他者」とは、両親（特に母親）およびパートナーを指す。

本稿は、喚起的オートエスノグラフィー（Bochner & Ellis, 2016）を採用した事例研究である。これは、一般化可能な知識構築を目的とする分析的オートエスノグラフィー（Anderson, 2006）とは異なり、読者の内省や共感を促すことを重視する（Bochner & Ellis, 2016）<sup>3)</sup>。「オートエスノグラファーは、読者に感じ、思いやり、そして望んでもらいたいと思っている」（Bochner & Ellis, 1996, p. 24, 筆者訳）。喚起的オートエスノグラフィーは、研究者と読者の間に感情的・経験的なつながりを生み出し（Bochner & Ellis, 2016）、読者の感情や想像力を喚起し、社会的理解や知識構築に寄与するとされる（伊藤, 2015；劉, 2018）。

本稿では、「私」の経験を通じて読者との共鳴を生み、読者が自身のアイデンティティと言語・氏名との関係を省察する契機を提供する。従来の社会科学的記述が専門性を重視するのに対し、本研究では個人的物語を通じ、幅広い読者に届く表現を採用し、理解と共感を促進する。一般化可能な仮説の提示ではなく、読者が「私」の経験を社会・文化的文脈で捉え直し、物語を通じた感情と記憶の喚起を通して、新たな物語や対話を生み出すことを目指す。こうした特性を踏まえ、本研究に最適な手法として喚起的オートエスノグラフィーを採用した。

本稿で用いるデータには、研究者である「私」の記憶や「感情的想起」、パートナーと父親との非公式な対話、父親の育児日記、結婚式で両親に宛てた手紙を含む。全て使用の同意を得ており、プライバシー保護のため他者の氏名や地域名は仮名を用いた。また、物語中の自己表記は、解釈および考察対象である「私」と区別するため、括弧を外して記載する。

#### 4. 結果—3つの物語—

##### 4.1 喪失—国籍と氏名—

私は2011年から2年間、中国浙江省杭州市の日本語学校で日本語教師として働いた。その後は中国や日本以外の海外で日本語教師を続けたいと考えていた。しかし、日本語教師の求人を複数のサイトで検索すると、募集要項の多くが第一条件に「日本国籍」を要求していた。そこに記載されていたのは、公的機関に限らず民間の日本語学校の募集要項も同様だった<sup>4)</sup>。私は中国国籍の永住者だった。この条件を満たすためには日本国籍の取得が必要だった。私は両親に相談し、家族3人で日本国籍を取得することになった。父親は煩雑な書類を一人で準備し、2012年末、私は中国から帰国した。

2013年の夏、私は両親と東京の中国大使館に向かった。狭い歩道で大使館の開館を待つ行列に加わり、金属探知機を通って建物に入った。エレベーターで担当部署へ向かい、書類に必要事項を記入して待った。私の番号が呼ばれた。ガラス越しの窓口に女性職員が座っていた。「你好」と声をかけ、書類をガラス窓の下にある小さな穴から渡した。職員はそれを受け取り、「換国籍啊（国籍を変えるんだね）」と聞いた。私は「对（そうです）」と丁寧に答えた。私は緊張していた。同時に耳を澄ませ、その女性職員の動作を見守った。中国には日本のマイナンバーカードに相当する「身份证」という身分証明書がある。手続きが進み、最後に私はお金とともに自分の身份证をガラスの穴ごしに渡した。

「バチッ！」。次の瞬間、女性職員は私の身份证に穴を開けた。たった数秒の出来事だった。嬉しいものでは決してない。たった数秒で、24年間の大切な人生に穴を開けられた感覚になった。以前、同じ中国系第二世代の女性が「よっしゃと思った」と話していたが、私にとっては決してそんなもの

ではなかった。悲しかった。苦しかった。できれば穴を開けないで欲しかった。使用できないようにするために、どうしてわざわざ本人の眼の前で穴を開ける必要があるのだろう。彼女は「拿回去这个吗（これを持って帰るか？）」と聞いた。私は、小さくうなづくだけだった。

パスポートの一角も切り取られた。小学生の私の顔写真が載った穴の空いた身分証明書、一角が切り取られたパスポートを受け取り、手続きは終了した。家族の努力で守り続けた中国国籍を失い、日本国籍取得の保証もないまま、効力がない自己を証明するものを手に持ち、自分が本当に正しい判断をしたのか不安になった。

数ヶ月が過ぎた秋晴れの日、私は両親と一緒にZ県にあるY市の地方法務局の一室にいた。それまで何度か訪れたその場所で、私達は個室に通された。担当者はスーツ姿の若い男性だった。男性は私達を個室に通す間、父親と友好的に話していた。個室に入り、私たちは担当者と向かい合って座った。男性職員から帰化申請手続きの説明を受ける中で、着実に手続きが進められていることを感じた。

しかし、ある話の段になると、部屋の雰囲気は変わった。彼は公務員の話す淡々とした中に、若干の戸惑いを感じさせる口調で、それを切り出した。「それで、お嬢さんのお名前なんですが・・」。担当者は続けた。「常用漢字の中から漢字を選んでいただく必要があります」。私達は沈黙した。男性職員は、一度席を立った。担当者が席を立ち、沈黙の後、私は父親と顔を見合わせた。家族3人とも言葉にならないが、戸惑っている気がした。

男性職員が部屋に戻り、入口に近い席に座る私の眼の前に、茶色い物体をどん！と置いた。私は固まつた。真っ白い机と対照的に、その物体は物凄く色濃く見えた。それは、私が生きてきた中で見た中で最も古く、分厚い辞典だった。職員は「じゃ、席を外すので、この中から選んでください」と言い残し、部屋を出ていった。狭い個室に私達3名は残された。

細かな情景は覚えていない。私が覚えているのは、私が泣いたことだ。そして、父親も泣いたことだ。私達は、分厚い辞典を開いた。暫くすると、父が「こういう漢字もあるね」と言った。そこには、『「皓」 しろい。白くかがやく。ひかる。あきらかなさま。きよい。いさぎよい。こうこうと照らす』と書かれていた。「・うん、ここに白へんがついてるね」と私は言った。母は心配そうに私達を見守っていた。

「しゃおしゃお晶晶」は、私が生まれた時、父が中国の図書館で分厚い辞典を読み漁り、見つけてくれた名前だ。『ある静かな夜、静かに流れる小川を月が静かに照らしている、その情景が『xiao晶』だよ』。父は私が物心つく頃からよく中国語で話してくれた。小学生の時、私は何度もそれを事あるごとに聞きたがった。その度に、初めて聞かせてくれるよう、父は一つ一つ教えてくれた。私の氏は、白なので、7つの白が揃った白晶晶という名前が好きだった。しゃおしゃお晶晶という漢字には、父が若い頃必死に探し出してくれた時間や思いが詰まっていた。しゃお晶という言葉もその情景も、そして短い親子の会話の時間も大好きだった。時々、しゃお晶という情景を想像し、「これが晶なんだ」と静かで穏やかな気持ちになった。

なぜ常用漢字しか使えないという理由で、父が大切に探し出してくれた漢字を変えなければならぬのだろう、と思った。しかし、事態が事態なだけに、「白へん」がついたその「皓」には「こうこうと光る」や「あきらか」である意味と「ひかり」という音があった。この時、私は通称名として使用していた「白川ひかり」を使用するか、しゃおしゃお晶晶の漢字は使えないまでも、片仮名やひらがなで表記するかも考えた。

しかし、自分自身と家族にとって何よりも重大な局面で、24歳の私の頭を過ぎたのは、なんと

卒業後、関わることがめっきり少なくなった、大学時代の親友だった。彼女や課外活動をともにした同級生や後輩達だった。友人たちに「私は本名が晶晶なんだよ」と話すことを想像した。中国ルーツを伝えるのは心細く不安だったが、親しい友人になら話せると思った。しかし、「ひかり」がなくなることも心配だった。

楽しかった大学時代に反し、高校時代の記憶は、私立の進学校で受験勉強ばかりしていた記憶しかなかった。当時、名前は「晶晶」を隠すように「ひかり」を使い、そして「ひかり」になっていった。しかし、大学時代は仲間が多く、同じ「ひかり」という名前を使っていても、自己認識が違った。皆から「ひかり」と呼ばれ、楽しい思い出がたくさんあった。名前を「晶晶」にすると、「ひかり」である私と友人たちとの繋がりが思い出とともに消えてしまう気がした。だから、20代前半の私は「皓」を選んだ。厳密には、法務局の個室で、突然選ば「された」。

日本国籍取得は、日本語教育を続けるために避けられない選択だった。少なくとも当時、夢を抱く私には他に選べる手段はなかった。しかし、氏名の漢字制限により、本当の名前「白晶晶」が公的な証明書から無くなり、「白皓」という新しい名前を選ばざるを得なかつたことは、次第に私という人間に、日本社会や日本語教育機関に対する不信感と憎しみを募らせる、決定的な出来事となつていった。「白晶晶」という本来の名前を失うことは、想定外の代償だった。その感覚は、国籍を変更したことへの後悔、両親への罪悪感、さらに自分自身への嫌悪感を増幅させた。私は、手続き後も新しい名前に馴染めず、自分自身を日に日に見失つていった。「白晶晶」として生きた時間とつながりを「喪失させられたこと」で、強い怒りが芽生えた。同時に、社会への不信感は増幅した。その感情は次第に、私から生きる活力も奪つた。希望や目的が消え、暗闇の中で孤独を感じ続けた。家族や中国の親戚たちとのつながりも失われたように思え、私は生きる意味を完全に見失い、自分が混乱し始めた。

#### 4.2 葛藤—母親との言語的齟齬—

私は高校に入学するまで母親と良好な関係だった。しかし、高校2年生の頃から母親と対立し疎遠になつていった。私は母親に対して、ひどい言葉を沢山投げつけた。しかし、本当は母と会話をしたかった。高度な日本語で高校の話をしたかった。入試の話をしたかった。その思いとは裏腹に、私は中国語を一向に話せなくなつていていた。母に制度的な高度な語彙を使うことは、何度も説明から始めなければならなかつた。それは、私にとって負担だった。できれば、他の家庭のように何も苦労せず、母と会話をしたかった。しかし、私には母と言語的に流暢にコミュニケーションを取ることが難しい状況が何度も起きた。

成人後、両親と暮らしていた時期、JA農協で大喧嘩をした。その日、私は両親とJA直売所へ野菜を買いに行った。毎週末行列ができる店だった。長いレジ待ちの行列で、後ろにいた3人の高齢の女性がこそこそ話している声が聞こえた。私には「中国人だよ」という声が聞こえた。私は怒つた。この頃私は大学院で差別や不平等、ヘイトスピーチの文献を多く読んでいた。〈まさかこの時代で自分の母親がヘイトを受けるなんて！〉と思った。

私は後ろを振り返り、怒りをおさえて3人に聞いた。「何を話しているんですか」。3人はとぼけた。「え？ 何が？ いやねえ」。母は私の腕を引っ張つた。「気にしないで」と言った。レジを済ませる最中も私はその3人と言い争つた。レジを済ませながら、両親は必死に私をなだめた。「いいよ、いいよ、帰ろう」。しかし、私は苦しくてたまらなかつた。「でも、この人たちはひどいことを言ったんだよ！」

中国人だってこそそと悪口を言ったんだよ！」。両親は怒り叫ぶ私をなだめながら車まで移動させ、私は気持ちをおさえられないまま、運転をし始めた。一部始終を農協の買い物客が眺めていた。

車内で、私は大人になってからはじめて本気で母親に叫んだ。「あの人達はお母さんの悪口を言つてたんだよ！どうしてそんな人達をかばうの！お母さんはいつもいつもそうやって赤の他人をかばつて、私のことは無視する！」「私はお母さんをかばったのに！」。大声で叫び、運転しながら大粒の涙が溢れ出した。母は後部座席から叫んだ。「いい！いい！気にしないで！！いいよ！」しかし、私は爆発した自らの気持ちを止められずに泣きながら話し続けた。次第に、助手席に座っていた父親も「三三は、あなたのことと思つて言ったんだ！」と二対一の構図になった。「三三」は中国の親族内の私のあだ名だ。母親は悲しそうに叫んだ。「全部、全部、私が悪かったんでしょ！」。

私と父は無言になった。私は、母をいじめる「悪い」人たちや社会から母をかばい、救いたいと思っていた。しかし、母は差別を受けていても、その人たちに何も言わずに我慢を続けていると思った。〈そんな「お母さんがかわいそう！」〉だと思った。また別の日も、私は道端で父親に泣きながら訴えたことがあった。その日も久しぶりに母とうまくコミュニケーションができなかつた。「本当はお母さんと話したいけど！お母さんが日本語ができるからわかってもらえない！私も中国語で上手に自分の気持ちを伝えられない！」「毎回私が早口で高度な語彙の日本語を使う時に何度も説明が必要なの！その説明も本当に伝わっているのかわからない！」と泣きながら父に訴えた。父は「落ち着いて」と言い、私を近くの駐車場でなだめ話を聞いてくれた。

母との関係は、言語的な齟齬によって大きく影響を受けていた。〈お母さんと深く話したい、理解し合いたい〉という願いがありながらも、私と母の間には言語的なギャップが存在していた。そのため、互いの感情や考えが誤解されることが多かつた。高校時代、学業や学校での話、自らの考えを母親に伝えたいと思った時、私は難しい日本語の語彙や概念を中国語で言う事ができなかつた。まず日本語で早口で自分の思いを話すことから会話が始まった。そして難しい言葉が出てきたり、自分の考えを話した後に、母に理解してもらえるかを一旦考え、説明に終始したりすることが多々あつた。

しかし、私が本当に共有したかったのは、感情や悩み、考え方そのものであり、自然に会話をして、すぐに共感や理解を示してもらひたかった。思いとは裏腹に、当時の私たちの会話では、共感や理解が及ぶ前に、言語的な説明や「お母さん、分かってるのかな」という配慮が必要だった。この過程は当時の私にとって、相当の負担だった。母からの反応で大抵の場合、誤解されているか、私が本当に伝えたい話の本質が伝わっていないと感じる時には「違う！分かってない！そんな話をしてるんじゃない！」と感情的に爆発した。

母とのコミュニケーションの齟齬は、私の中で徐々にストレスとして蓄積し、結果、感情的な反応を引き起こすことが多くなつた。言葉での理解が深まらない時、非言語的な反応が誤解を生み、母親には私の爆発だけが伝わってしまい、傷つけることが度々あつた。しかし、私も私で自分が本当に伝えたいことが伝わらない悲しさがあつた。言語的な齟齬は、私と母の関係性の悪化に影響した。

私は、大学進学を機に第二言語として中国語を学び始めた。両親や中国にいる親戚との会話を深め、もっと話せるようになりたいと思った。大学を卒業後、日本語教師になった後、中国での生活や仕事を通じて、中国語の書く力と読む力、話す力が向上した。次第に中国語で両親に自分の思いを伝えることができるようになった。私は、言語的な壁を超えて、母との絆を再び取り戻したかった。中国にいる親戚とも絆を深めたかった。そのため、私にとって中国語の影響力は大きく、親子や中国の親戚

との関係に決定的な役割を果たしていた。私はオートエスノグラフィー記述に次のように記した。

### 母への思い

母との絆を言語は絶対に繋いでくれる。間違いなく言語は重要だ。それは日本語でも中国語でもいいが、母が第二言語の日本語を高度に話すことは無理な話だ。私が中国語を話せるようにならなくてはいけない。私は母とコミュニケーションを取りたい。母と会話をしたい。母と通じ合いたい。母と笑い合いたい。心を通じ合いたい。

2024年5月30日オートエスノグラフィー記述

この記述にある思いは、高校時代の葛藤を思い出しながら記述したものだ。私が本当は母を思っていたにもかかわらず、ひどい言葉を投げつけてしまった食事の日、泣いている母の姿を見ても素直になれなかつた自分、これらの記憶が上記の記述に込められている。母への思いを記す中で、私は葛藤とそれを乗り越えようとする自己を見出していく。

## 4.3 回復

### 4.3.1 パートナーからの呼びかけ

2018年に博士後期課程に進んで以降、私の日本社会や「日本人」に対する憎しみは最も高い状態にあった。自分が誰なのか、なぜ私は国籍と氏名を変えなければならなかつたのか——苦しみの中、2019年から開始した世界的なパンデミックの感染拡大による困窮と孤独が追い打ちをかけた。アルバイトが一時期全く入れず、毎日通っていた大学の図書館は閉鎖され、私は行く場所を失つた。

混沌とした状況の中、私はひたすら散歩することを日課にした。賃貸アパートの近所には、小川を囲むように3から4kmほどの散歩道があった。ある日の午後、私は啓示を受けた。散歩道の折り返しを過ぎ、右手に公園が見えるところを私は走っていた。高まる鼓動と肺に息を送り込もうと必死で働く口呼吸を繰り返しながら、全力で前に向かって小走りの競歩のような状態の最中、眼前に視覚的なイメージが浮かび上がった。眼の前には暗闇の中、純白のドレスに身を包んだ二人の女性が歩いていた。そのうちの一人が私だった。そして、それを祝福する大学時代の友人や家族の笑顔が見えた。私は相手の女性と最高の笑顔で笑い合っていた。

私はかつて感じたことのない喜びを感じた。〈そうだ！私は、結婚したい！〉と思った。興奮し恍惚とした。もはや走っているともいえる速度の競歩を終え、クールダウンのために歩幅を落として歩き始めてからも、脳内はさきほどのイメージと幸福感でいっぱいだった。〈私は、結婚がしたい！〉、心の底からそう思った。その後も、何度もそう思ったし、結婚をイメージした。そして、私はインターネットで同性が知り合うSNSを利用して、最愛の女性と出会つた。私達はお互いの家を行き来するようになった。

ある日、彼女の自宅で何かの話の最中、彼女は私を強い人だと言ってくれた。「ひいちゃんって強いよね」「…(微笑む) 強くないよ」。私は、パソコンを開き、自らが書いたオートエスノグラフィー記述を彼女に見せた。彼女は無言で読み進め、途中から涙を流した。ぽろぽろ落ちる彼女の涙を見て、私もぽろぽろ泣いた。彼女は私を優しく抱きしめてくれた。「ごめんね。私、これから『しゃおちゃん』つ

て呼ぶようにするね」「(ぼろぼろ涙を流しながら) ありがとう。でも、無理しなくてもいいよ。『ひかり』でもいいよ」。彼女は首を横にふった。

この日を境に、彼女は毎日私を「晶ちゃん」と呼びかけてくれるようになった。出会いと付き合って数ヶ月に渡り「白皓」として出会っていたため、呼び名を直すことは、彼女の中でも葛藤があつたと思う。時々、無意識に出る私を呼びかける名前は「ひいちゃん」だった。しかし、その後に「晶ちゃん」と呼び直してくれた。私は、自らの話を読んでもらうことがこんなにも大きな変化（他者にとっては大したことのないことでも、自分自身にとっては、生存／実存に関わることだった）を生むのか、と思った。

彼女が「ちゃん」と呼びかけてくれる度に、私は生き返った。両親が産み落してくれた24歳まで存在していた私の身体は、もはや憎しみを宿しただけの「もの」になっていた。彼女からの「晶ちゃん」という呼びかけは、私に血を流してくれた。水をくれた。空気をくれた。私の心臓は静寂の中、再び一回、一回と脈を打った。息を吹き返した。文字通り、パートナーの呼びかけが私に命をくれた。ぎこちなく、戸惑いつつ、涙を流しながら、彼女が私に命をくれた。——彼女の呼びかけが、私に「命」を与えてくれた。

私は、私のことを「晶晶」と呼んでくれる人々を思い出していった。アイデンティティの拡散の後、私は私のことを「晶晶」と呼んでほしいとお願いをした三人がいた。博士前期課程時代、同じ領域を専攻した同期の三人だった。彼女たちは私を「晶晶」「晶ちゃん」と呼んでくれた。私は「日本社会」や「日本人」、「日本語教師」「日本語教育」という言葉や日本の国籍や戸籍の制度に対して、憎しみを抱いていた。しかし、パートナーからの「晶ちゃん」という日常的な呼びかけによって生まれた、温かく優しい気持ちは、私を「晶晶」と呼んでくれる、パートナー以外の「日本人」の人々を思い出させた。

私は、パートナーの呼びかけをきっかけに、自分自身のアイデンティティを再確認した。その後も勇気を出して、周囲の人々に「晶晶」と呼びかけてもらうように働きかけた。そして、私はパートナーと結婚式を計画した。その過程で、担当のプロデューサーと結婚式場のスタッフから、両親と向き合うための力強い応援とエンパワーメントを得た。彼女たちは、私を「晶さん」と呼んでくれた。自己同定の再構築と「トラウマ」に向き合うきっかけと勇気をくれた。彼女／彼らからの呼びかけも、私に生きる力をくれた。

「晶晶」——この本名は、現在進行形で私のアイデンティティの再構築の中心にある。しかし、私は深い傷を負った。傷は経験として、心臓の内部に、身体に、深く刻みこまれた。傷は死ぬまで消えない。私は傷口を抱えて、今を生きている。

#### 4.3.2 両親に対する感謝と日本社会に対する憎しみの寛解

2024年3月のある日、結婚式前に両親への手紙を中国語で書いている際、私は驚くべきことに気づいた。それは、中国語で汚い言葉が全く書けないということだった。この発見は、私にとって衝撃的な気づきとなった。私は手紙に次のように書いた。

#### 両親への感謝と中国語に対する思い

妈妈，谢谢生我。（中略）我不知道为什么，但感觉用汉语感觉很幸福。没有痛苦。因为可能汉语

是对于大部分的我的人生是和爸爸妈妈交流的语言。爸爸妈妈没有任何一个句都没有和我说不好的话。爸爸妈妈什么时候都和我说温柔的一句一句。不是语言重要而是这个语言可以连我们一起，通过这个语言可以想起爸爸妈妈给我说的话，可以想起它们的记忆。我通过日语，记到学到好多脏话，脏经验。但是，最后我还是胜利。因为爸爸妈妈把我的脏东西清洁净化。

(お母さん、私を生んでくれてありがとう。(中略) 私はどうしてかわからないんだけど、中国語を使うととても幸せな感じがするんだ。辛いことがない。多分もしかしたら、私の人生の大部分にとって、中国語はお父さんとお母さんと交流する言語だったからかもしれないね。お父さんとお母さんは私に対して一切良くないことばを言わなかつた。お父さんとお母さんはどんな時も私に温かい一言一言をかけてくれた。言語が重要なんじゃなくて、この言語が私たちを一つに繋いでくれて、この言語を通して私はお父さんとお母さんが私に言ってくれたことばを思い出だすことができる。それらの記憶を思い出すことができる。私は日本語を通してたくさんの汚いことばや経験を記憶し学んできた。でも、最後に私はやっぱり勝ったんだ。お父さんとお母さんが私の汚いものをきれいにして浄化してくれたから。)

結婚式で両親に宛てた手紙（2024年3月7日、括弧内筆者訳）

私はアイデンティティが混乱し始めてからの10年以上もの間、汚い憎悪に塗られた日本語の世界にいた。私にとって、この発見は衝撃だった。マスメディアやSNSで目や耳にするヘイトスピーチと排他的言説、ナショナリズムの言葉、日本語教育で耳にする本質主義に基づいた言説と無自覚な教育関係者、そしてこれらに対する憎悪という、社会と日本語教育全体に対する憎悪の世界にいた。しかし、中国語で両親に向けて手紙を書き、気づいたことは、両親が私に対して使ってくれた言葉が、いつも温かく優しいものだということだった。なぜなら、中国語は私が唯一家庭で使用していた言葉だったからだ。

私の中国語の使用相手は両親であり、両親以外とは大学での第二外国語としての学習、大学院留学の半年以外、ほぼ使用したことがなかった。1993年に来日して以来、私はR市の外国人非居住地域に暮らすニューカマーだった。幼稚園の入園と小学校入学以来、日本人に同化して成長していた。しかし、中国語で汚い言葉が書けないという気づきは、私が10年間以上抱えていた憎しみの世界に、幼少期の明るい自分を衝撃的に思い出させた。中国語で手紙を書く際、走馬灯のように両親と私の情景を思い出した。写真を見て記憶した情景、両親から聞いた昔話、その話から想像した自分の幼い姿と笑顔が見えた。

裸で笑顔の二歳児の私の体を支えながら洗う、パンチがかかった髪の毛の笑顔でカメラに向かって笑う若い母親。白いシャツに黒いサングラス、ジーパン姿の今よりも黒髪が残る若い父親と笑う私。瀋陽市の马路湾儿という地区に母方の祖父母と一緒に住んでいた家のベッドの上で、祖父母、両親に見守られながら、よちよち歩く二、三歳児の自分が見えた。両親の生え際と耳の上の白髪、目尻の皺、茶色く焼けた肌、黒くなった爪、身を粉にして働き私を大学まで行かせてくれた働く両親の姿が浮かんだ。その家のリビングダイニングでくだらないことで、涙が出るまで笑い続けた3人での食事の風景を思い出した。

3歳になる頃、サーカスがあるからと行きたいとせがんだのに、席に着いた瞬間、知らない場所に慣れず帰りたいと父に伝え、雨に降られずぶ濡れになって帰宅したという父が話してくれた話。祖母

と手を繋いで酸奶（ヨーグルト飲料）を買った曲がり角、母の背中を見ながら、自転車の後ろに乗り、駆け降りた大きな坂、夕方、退勤後の母がかけてくれた“买酸奶吗？”（「酸奶買う？」）。青年期を思い出しては、幼少期の情景をまた思い出した。

私は、「日本社会」「日本人」「日本語教師」「日本語教育」、そして日本の国籍や戸籍制度に強い憎しみを抱いていた。しかし、両親の温かい言葉や優しい愛情を思い出すことで、その憎しみが次第に緩和していった。結婚式前に両親への手紙を中国語で書く中で、私は両親への愛と感謝の気持ちを深く感じた。汚い言葉が一切出てこないことに気づいた瞬間、涙が止まらず、両親への愛情と感謝の気持ちが溢れ出した。

この経験は、私の心を浄化し、再び生きる力を与えてくれた。両親の愛情を再認識することで、私は自分自身を肯定し、笑顔で明るい自分を思い出すことができた。私は愛される存在なのだと理解した。今までの私の明るい笑顔、心から私を愛してくれていた大切な祖母と両親の愛情に触れ、中国語で手紙を書きながら、汚い言葉が出てこないことの意味を知った。これらの情景を思い出すことで、両親の愛情が私の人生にどれだけ大きな影響を与えてきていたのかを再認識することができた。結婚式前に中国語で両親への手紙を書くという経験は、私にとって自身のアイデンティティと向き合う「架け橋」となった。

## 5. 考察

本稿の目的は、名前と家族のことばがアイデンティティに与える影響を読者に提示し、対話を促すことであった。このために、喪失・母親との言語的齟齬・自己の回復の物語を描き出した。本節では、「私」がいかに母語と本名を通じて自己を認識し、それが両親とパートナーとの関係にいかなる影響を与えたのかを考察する。

まず、「私」にとって家族のことば、すなわち母語は単なる意思疎通の手段ではなく、親子の感情的なつながりを築く大切な媒介であった。「私」の母親との齟齬の背景には、本当の気持ちや考えを素直に伝える勇気や、感情的な共感を得たいという強い願いがあった。葛藤の物語（4.2）から、「私は思春期に、母親と言語能力の差による齟齬を経験し、それが関係性に影響を与えていたことが分かる。これは第一世代と第二世代の間に生じる典型的な言語的葛藤であり（内山, 2017；清藤, 2020；三浦, 2024）、関係の断絶を深める可能性がある。Curdt-Christiansen (2018) は、家族言語政策が環境や世代間相互作用に依存すると述べる。当時「私」の家庭では、母親との意思疎通に齟齬が生じた際、通訳を頼れる父親が単身赴任で不在であった。加えて、外国人散在地域で一人っ子として育つたことで、中国語の使用頻度が激減した。母親への想いとは裏腹に、言語的齟齬やフラストレーションを生じさせていた。

母親との関係においては、日本語の影響が強まるにつれ、隔たりも広がった。日本語と中国語の能力差が齟齬を生み、衝突と壁を生じさせた。特に思春期以降、関係性が次第に疎遠になっていった。しかし成人後、「私」は結婚式の手紙で中国語を用い、両親に感謝の言葉と気持ちを伝えた。これは単なる意思疎通を超え、関係を主体的に位置づける契機となった。両親に対する感謝の物語（4.3.2）に描かれているように、成人後、結婚式の手紙を中国語で書く際、「私」は、自分が母語で汚い言葉を思い浮かべることすらできることに気づいた。手紙を中国語で綴るという行為は、「私」にとって

て自然な行為でありながらも、家族との記憶を編み直し、母親との関係を見つめ直す重要な契機となつた。手紙を書く中で、両親が私に向けてくれた温かく優しい言葉を思い出し、それが幼少期の幸福な記憶や家族との何気ない日常と結びついていることを再認識した。社会への憎しみの中で見失っていた両親の愛情に気づき、涙が止まらなかつた。

この経験は、「私」のアイデンティティそのものを見つめ直す契機ともなつた。中国語は、「私」にとって感情の伝達と共感を可能にする手段であり、媒体であったと言える。滑川（2010）は、母語が子どものメタ認知能力の促進や親子のコミュニケーション確保に貢献すると指摘する。本稿ではこれに加え、母語が感情的なつながりの媒介となる役割を持つこと、また子ども期に限らず、成人後も親子関係の修復や再構築に寄与することを見出した。すなわち、家族のことばは、自己認識や親子関係の再定位を可能にし、ライフコースにおける関係修復や再構築の契機となり得る。

つぎに、「私」は日本国籍取得に伴う本名変更を経験し、それが自己認識に深刻な影響を与えた。喪失の物語（4.1）からは、日本国籍取得時、「私」が戸籍法の人名漢字制限（矢沢，2022）により本名一すなわち、氏と名の双方を含む自己の根幹一を変更せざるを得ず<sup>5)</sup>、その過程で文化的背景や存在そのものの混乱を招き、両親への罪悪感や自己嫌悪感を引き起こしたことが分かる。求職時の国籍要求や日本社会、日本語教育に対する不信感が加わり、孤独感と憎悪を深める要因となつた。また、ヘイトスピーチやナショナリズムの高まり、右翼的言説がメディアやSNSを通じて目に入る中、日本社会における十分な議論の欠如が「私」の心を蝕み、憎悪と社会的孤立感を深刻化させた。

しかし、パートナーが「私」の本名を尊重し呼び続けてくれたことは、実存感覚と自己認識の回復に決定的な影響を与えた。「私」は成人後、結婚式の手紙で中国語を用い、母親に感謝と気持ちを伝えることができた。母親への思いを伝える契機となったのが、パートナーによる本名での呼びかけによるところが大きい。「私」は回復の物語（4.3.1）に見るよう、パートナーにオートエスノグラフィー記述を開示し、本名の「晶晶」で呼びかけてもらうことを求めた。名前は単なる識別手段ではなく、強い感情的価値を持つアイデンティティの象徴であり（Falk, 1975）、「晶晶」という名は、「私」の自己同定の核として欠かせないものであった。勇気を出して本名を呼びかけてもらう実践を通して、「私は自身の物語を再構築し、信頼する他者に短くとも物語を語ることで「物語の証人」となってもらつた（フランク，2010）。

本名への回帰は自己を開示し、アイデンティティを選び取る過程であり、氏名が自己認識や社会的なつながりの再構築に果たす役割を示している。制度的・社会的な困難を経験しつつも、アイデンティティの危機を乗り越える契機となった本過程は、「私」に名前が持つ象徴的価値の重要性を再確認させた。「私」は本名の変更を余儀なくされ、葛藤を抱えていたが、喪失した自己一すなわち、「晶晶」という自己一が再び息を吹き返す契機であったことがパートナーとの関係において見出される。そして、自己同定の象徴である「晶晶」という名前がパートナーから呼びかけられることで、私は自己の存在と意味をより深く問い合わせた。

その過程では、父親との対話が理解の深化に大きな役割を果たした。本研究を進める中で、「私は父親と非公式の対話を重ね、自己のあり方を意味づける契機を得た。オートエスノグラフィーの実践を通じて、「私」という個人が他者との関係性の中に存在し、包含され、つながりの中で自己を形成していくものだと認識した。「私」にとって、母語と本名は「重要な他者」との関係を繋ぎ、維持し、「私」という存在そのものを形成する役割を果たしていた。すなわち、アイデンティティが単一的か

つ自己完結的に成立するものではなく、関係性の中で複数の「私」が生成・形成され、複数の関係性の根幹となる、重要な他者をつなぐ媒介として母語と本名が不可欠であるという認識と意味づけを見出した。そのため、「私」にとって母語と本名は、単なる情報伝達や識別のための手段ではなく、「重要な他者」との関係を繋ぎ、維持し、自己の在り方を形作る重要な要素である。

この認識は、成人後に両親やパートナーとの関係を見つめ直す中で深化した。ニューカマーの氏名選択に関しては、藪田（2013）が在日コリアン生徒の「通名から本名へ」の実践とは異なる、ベトナム系の子どもの本名を名のる実践を教育・支援者側の視点から提示している。これはストーリーの揺らぎに関する知見を提供する一方、氏名や母語の意味づけがライフコースの中で変容し、成人期の自己認識や親子関係に及ぼす影響については、さらなる研究が求められる。本稿では、子ども期の氏名選択を単純に「主体的行為」とするのではなく、多様な背景と長期的視点を考慮し、成人後の再解釈を通じて本名を名のる行為の意味づけを当事者の視点から描きだした。氏名選択の意味づけは、当人の思いや感情、ライフコースにおける経験、社会的環境や人間関係をはじめとする様々な要因が複雑に絡み合うため、多様な背景と長期的な視点を踏まえ、当人の視点に立った慎重な検討が必要である。本稿では、成人後の再解釈を通じた母語と本名の意味づけの変容が、「重要な他者」との関係性や自己認識と深く結びついていることが窺え、こうした視点の重要性が示唆される。

また、本研究の方法論的意義として、オートエスノグラフィーを用いることで、言語と氏名の持つ意味を長期的視点から問い合わせ場を読者と共有し、アイデンティティの形成過程を「重要な他者」との関係の中で往還的に捉える契機を提供した点が挙げられる。「私」の経験からは、母語と本名が個人のアイデンティティ形成において、他者との関係を繋ぎ、築き、維持しながら、自己の存在そのものを形作る不可欠な要素であることが示唆された。「私」にとって、アイデンティティは自己完結的に成立するものではなく、他者との関係性の中で動的に形成・変容し、かつ複数の存在・あり方を持ちうる。特に、母語と本名は「私」の「<sup>しゃおしゃお</sup>畠畠」という自己の回復と安定において、重要な媒介として機能している。対人関係療法（Interpersonal Psychotherapy）では、「重要な他者」との良好な関係性が精神的健康に寄与するとされる（水島, 2009）。名前と家族のことば——母語と本名は、「私」の存在をかたちづくり、「重要な他者」との絆を紡ぎながら、メンタルヘルスと接続している。

## 6. おわりに

従来、母語は子どもの言語習得や認知発達の観点から論じられてきたが、本研究では、成人期においても母語と本名が自己認識や親子関係の再構築に果たす役割を示した。家庭内の母語は単なる意思疎通の手段にとどまらず、感情の伝達や重要な他者との関係性の維持に不可欠な要素であることが示唆される。また、本名は、アイデンティティの回復と安定に寄与し、自己同定を支える根幹として機能することが確認された。特に、本名で呼ばれる経験は「私」にとって喪失した自己を取り戻し、存在の確認と肯定の契機となった。

今後の課題として、第一に、異なる文化的背景やライフコースを通じた比較研究が必要である。異文化間や同世代間での長期的変容の分析（Fogle, 2013）を通して、アイデンティティ形成の多様性をより包括的に理解することが求められる。第二に、教育現場での氏名と言語の比較研究を行い、「母語話者の特権」や「国籍要件」がアイデンティティに与える影響を検討することが課題となる。第三

に、オートエスノグラフィー研究の手法的課題を整理し、理論的検討を通じて、本手法の限界と可能性を探ることが重要である。

### 謝辞

本稿の執筆・改訂にあたり、貴重なご指摘をいただきました2名の査読者の先生方に深く感謝申し上げます。

### 注

- 1) 小林（2001）では、近代以前の社会から続く、言語的差異に対応する社会的差異の存在、ジェンダー、襲名等の慣行による名前の体系に言及している。また、大藤（2012）では、中国との比較から日本人名の特徴を論じている。詳細は参照されたい。
- 2) 本研究のデータは2022年4月以前の経験も含む。オートエスノグラフィーは「個人的経験の深い理解」を起点とする方法論であり（アダムス他, 2022, p.50）、しばしば人生の転機や気づきを伴う「エピファニー」を重視する。これは本手法が時間的視点を持つことを意味し、本稿の基盤となる。私のエピファニーは、アイデンティティの危機と混乱に関わる経験であり、本稿ではその背景と形成過程を描き出すため、過去の経験と現在の状況を関連づけて記述した。
- 3) 土元・サトウ（2021）は、オートエスノグラフィーの方法論的志向性を4つの象限に類型化している。詳細は土元・サトウ（2021）を参照されたい。
- 4) 日本語教育機関の募集要項に国籍条件がある事案が、特定の国や地域の問題であるかは、今後更に調査が求められる。私が当時目にした求人情報は、主にアジア諸国の求人であった。
- 5) 本規定は、法律上、氏名に使用できる文字を常用漢字および人名漢字に基づく2,999文字に限定している。矢沢（2022）は、戸籍法に基づく人名漢字の使用制限が「国民の姓名権（氏名権）」を不当に侵害している可能性があると問題視している。
- 6) アイデンティティ構築の社会性を考慮した際、家族以外の他者も重要な存在ではあるものの、紙幅の関係上、別の機会に譲る。

### 引用文献

- アダムス, トニー E・ジョーンズ, スティシー ホルマン・エリス, キャロリン(2022)松澤和正・佐藤美保訳『オートエスノグラフィー—質的研究を再考し、表現するための実践ガイド』新曜社  
 石原真衣(2021)『「沈黙」の自伝的民族誌(オートエスノグラフィー)—サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版  
 伊藤清男(2015)「人材育成研究における『自己エスノグラフィー』の可能性」『九州産業大学経営学論集』25, 25-43.  
 井本由紀(2013)「オートエスノグラフィー—調査者が自己を調査する—」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践—』(pp.104-111)新曜社  
 内山絵理華(2017)「日系2世のアイデンティティ形成における言語の影響と役割—継承語教育の観点から子どもの心を解く—」『コンタクト・ゾーン』9, 98-141.  
 エリス, キャロリン・ボクナー, アーサー(2006)「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者—」N・K・デンジン, Y・S・リンカン編, 大谷尚・伊藤勇編訳(pp.129-164)北大路書房  
 大倉得史(2013)「同一性の危機」日本発達心理学会編『発達心理学事典』(pp.314-315)丸善出版  
 大藤修(2012)『日本人の姓・苗字・名前一人名に刻まれた歴史—』吉川弘文館  
 北原モコットゥナシ・富田望・オーリリチャ・福島青史(2024)「言語とアイデンティティ—当事者の視点から—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』20, 28-36.  
 清藤春香(2020)「親子間の葛藤の解消に対する各種コミュニティの可能性と課題—中国系ニューカマー第二世代を中心にして—」『AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies』9, 37-64.  
 小林大祐(2001)「名前の社会学的分析に向けて—漢字がつくる同一性のなかの差異—」『評論・社会科学』65, 23-41.  
 駒井洋(1995)『定住化する外国人』明石書店  
 鈴木隆雄(2010)「当事者であることの利点と困難さ—研究者として／当事者として—」『日本オーラル・ヒストリー研究』6, 67-77.

- 薛鳴・陳於華(2012)「在日中国人子女の言語使用意識とエスニシティーある中華学校でのアンケート調査から—」『言語と文化—愛知大学語学教育研究室紀要—』53(26), 31-49.
- 知念聖美(2019)「継承日本語とアイデンティティ形成」近藤プラウン妃美・坂本光代・西川朋美編『親と子をつなぐ継承語教育—日本・外国にルーツを持つ子供—』(pp.15-25)くろしお出版
- 土元哲平・サトウタツヤ(2022)「オートエスノグラフィーの方法論とその類型化」『対人援助学研究』12, 72-89.
- 丁茹楠(2022)「熊本市における中国人ニューカマーの定住化」『地理科学』77(2), 59-78.
- トロイツカヤ, ナターリアニコラエヴナ(2015)『日系ペルー児童の複言語能力とアイデンティティに関する一考察—日本語教育とバイリンガル継承語教育の観点の融合を目指して—』早稲田大学日本語教育研究科博士論文
- 永井智(2015)「『新華僑二世』のアイデンティティを探る」『多文化関係学』12, 3-20. DOI : 10.20657/jsmrejournal.12.0\_3
- 永田彰子・岡本裕子(2008)「重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴—信頼感およびアイデンティティとの関連—」『教育心理学研究』56(2), 149-159.
- 滑川恵理子(2010)「母語による国語の学習を親子で実践する—『わたしの文化』を活かして—」『多言語多文化—実践と研究—』3, 127-149.
- 白皓(2020)「中国系ニューカマー第二世代が直面し得る問題」『華僑華人研究』17, 45-55.
- 樋口直人(2024)『ニューカマーの世代交代—日本における移民2世の時代—』明石書店
- フランク, アーサー(2010)鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理—』ゆみる出版
- 三浦綾希子(2024)「移民家族が直面する日本社会の障壁—こどもと親のWell-beingを考えるために—」『計画行政』47(2), 9-14.
- 水島広子(2009)『対人関係療法でなおすうつ病—病気の理解から対処法、ケアのポイントまで—』創元社
- 矢沢久純(2022)「姓名に対する制限の妥当性に関する予備的考察—特に日本における人名漢字の制限をめぐって—」『北九州市立大学法政論集』49(3・4), 576-550.
- 藪田直子(2013)「在日外国人教育の課題と可能性—『本名を呼び名のる実践』の応用をめぐって」『教育社会学研究』92, 197-218.
- 梁正善(2022)「日韓国際結婚家庭における親子のライフストーリー—アイデンティティと言語を中心として—」『東アジア研究—東アジア学会機関誌』30, 69-96.
- 柳赫秀(2016)「『静岡本名裁判』と在日韓国朝鮮人社会」『横浜法学』24(2-3), 1-27.
- 劉昊(2018)「在日中国人ニューカマーとしての『私』の成長物語—オートエスノグラフィーを手がかりに—」『日本社会学研究』26, 78-91.
- Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35(4), 373-395.
- Bochner, A. P., & Carolyn, E. (1996). Talking over ethnography. In C. Ellis & A. P. Bochner (Eds.), *Composing Ethnography: Alternative Forms of Qualitative Writing* (pp.13-45). Alta Mira Press.
- Bochner, A. P., & Carolyn, E. (2016). *Evocative autoethnography: Writing lives and telling stories*. Routledge.
- Curdt-Christiansen, X. L. (2018). Family language policy. In J. Tollefson & M. Perez-Milans (Eds.), *The Oxford handbook of language policy and planning* (pp.420-441). Oxford University Press.
- Falk, A. (1975). Identity and name changes. *Psychoanalytic review*, 62(4), 647-657.
- Fogle, L. W. (2013). Family language policy from the children's point of view: Bilingualism in place and time. In M. Schwartz & A. Verschilk (Eds.), *Successful family language policy* (pp.177-200). Springer Netherlands.